2018年2月11日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　**「エリヤの時代の南北王国」**

聖書箇所：第二歴代誌21:12-20

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日の聖書箇所としてお読みいただいたのは、北王国イスラエルで活動していたエリヤが南王国ユダの第五代の王ヨラムに“真の神への信仰からはなれた故にユダ王国に災難が臨み、ヨラム本人も大病になり、死ぬであろう”という不吉な預言をする箇所です。そして、そしてペリシテ人やアラブ人による侵略によってエルサレムの王宮は財産をはく奪され、ヨラムは内臓に関する重病にかかり、死ぬことになります。聖書はその結末として21:20で「彼は人々に愛されることなく世を去った。人々は彼をダビデの町に葬ったが、王たちの墓には納めなかった。」と記されています。

　今日お話ししたいのは、ソロモン王の死後分裂した南北両王国がその初期においてどのような歩みをしたかをみることです。このなかで弱小二王国が互いに牽制し合いながら、アッシリヤとエジプトという二大帝国の間でどう生き延びようとしたか、という点に注目したいと思います。この歴史の中には、政治と宗教の問題、国家指導者の決定方式、王権をめぐる弾圧と権力簒奪など、現代に至るも解決の見出されていない多くの問題が見られます。BC9cのイスラエルという特殊な状況を現代にそのまま当てはめたりするのは赦されることではありませんが、我々キリスト者が政治に対し、どのような姿勢で臨むべきかを考える契機にすることができると思います。

歴代誌は南王国ユダの歴史に特化していますが、ここでは北王国を含んだイスラエル全体についてみることと致します。まず、北王国の方を見ます。そもそも、ソロモン王によってイスラエルが強国に数えられるようになったところがその死後分裂したのはどうしてでしょうか。ソロモンの死に際してはその子レハベアムが王位を継承するのがメソポタミア、エジプトを含むこの地域における一般的王位継承方式でした。しかし、イスラエルは伝統的に、王制に対し懐疑的な民族で、血縁による王位継承を自動的に認める伝統ではありませんでした。預言者という主なる神、ヤハウェ―の言葉を預かる人物の指名が無ければなりません。そして、その預言者の指名を民衆が受け入れ、王として指導者になるのです。このとき、民衆のなかにはソロモン時代の過酷な支配に対する不満が高まっていました。そのため、民衆はレハベアムに対し、税金と強制労働の軽減を要求しました。レハベアムはこれを聞き入れるべきだという長老たちの意見を聞かず、これを拒否いたしました。そして時の預言者アヒアはヤラベアムを王に任ずることを拒否します。その結果、ソロモン時代に王に反抗し、エジプトに亡命していた、曾てのソロモンの部下、ヤラベアムがイスラエルに戻ってきます。預言者アヒアは彼を王に指名します。軍がこの王に指名されたヤラベアムを歓呼で迎えます。この結果、亡命帰還者ヤラベアムを王とする北王国イスラエルと、ソロモンの実子レハベアムを王とする南王国ユダとに分裂します。ユダ族のすぐ北を嗣業地とされたベニヤミン族のみがユダ族に組します。したがって南王国ユダ王国はユダ族とベニヤミン族だけでそれ以外は、北王国です。但し、その後、ユダ王国はヤハウェ―信仰を強め、イスラエル全土から祭司を取り次ぐレビ族を集めたため、部族としてはユダ王国はユダ族、ベニヤミン族、レビ族である、と言えます。この分裂によってソロモン時代に、イスラエルに隷属していた周辺国が離反の動きを見せます。北から、アラム、ギレアド、モアブ、エドム、ネゲブです。また、従来より友好関係にあったフェニキアは更に影響力を強めようとし、長年の対立国ペリシテはユダ王国に、侵入の機会を見計らいます。

最初の試練は、エジプト第22王朝の初代の王シシャクがユダ、イスラエルに侵入してきたことです。エジプト第21王朝は弱体な王朝でありイスラエルにとって脅威とはなりませんでしたが、リビアの部族がエジプトを支配下に入れ、第22王朝をつくると、体制を整え、カナン進出をいたします。そしてユダ、イスラエルの各地で掠奪を行います。ユダ王国のレハベアムはエジプト軍近衛兵に賄賂を贈り、手加減してもらった、ということが列王記14:27に記されています。北王国も親エジプトの姿勢をしめすことにより、エジプト軍を掠奪のみに留めることに成功します。エジプト軍は掠奪のみで、占領し、滞在することはなかったようです。エジプト国内体制の強化のため、略奪行為により戦果を示す必要があったのでしょう。国内体制強化のために、外国に高価な兵器を買わせて手柄にしている国家指導者もこれと似たようなものです。役にも立たない、かつ役に立たせてはならない兵器をほいほい買う従属国の無節操な政治家もきいてあきれます。南北両王国が成立した経緯からして両国が対立的になるのは当然です。南王国ユダの首都は当然エルサレムです。ユダ王国レハベアム王は北王国を攻撃しようとしますが、ユダ王国の「神の人」これは預言者の内最も権威のある人物を指している、と思われますが、そのシェマヤは「兄弟と戦ってはならない」という神の言葉を告げます。まだ両王国を一つのイスラエルとする見方は当時まだ生きていたと思われます。しかし、王は北王国の侵入を防ぐために、ベニヤミン族の嗣業の北にいくつかの要塞都市を築きます。

では、北王国のBC9cの歴史を追ってみます。初代の王ヤラベアムは22年の長い治世でした。彼は北王国の国としての基盤を作るために腐心しました。彼はアブラハム以来のヤハウェ―信仰の地であるシェケムで即位し、その後、ヨルダン川東のぺヌエルにうつり、そして更にヨルダン川西岸のティルツァに都を移します。一時、ヨルダン川東に首都をおいたのは、離反の可能性のあったギレアドににらみを利かせるためだったと思われます。どうも最後まで、北王国イスラエルとしての一体感を持たせることはできなかったようです。ダビデの家系から離れた状態での王国維持は困難があったと思われます。「ダビデ契約」という神の祝福の約束を引き合いにだすことができなかったのです。信仰の正当性は南王国に奪われてしまいます。宗教的には、ユダ王国にならってヤハウェ―信仰を国の宗教にしようとしました。そしてエルサレム神殿に代わるものとして南はユダとの国境に近いべテル、北はアラムとの国境で伝統的にイスラエルの北限とされてきたダンに「主の宮」をつくり金の子牛をおきました。これらをエルサレム神殿に代わるものとしたのは伝統的イスラエルの信仰からは大きな罪です。また祭司としてレビ人ではなく一般の人から祭司を任命した、とされています。イスラエルの律法に反することは明白です。カナンの地での地場信仰である農業女神アシェラ崇拝が民衆の中に広く行き渡っており、ヤラベアムはこれを放置する態度だったようです。宮廷にも地場信仰の影響は強く、とてもヤハウェ―による宗教一元化には程遠い状況でした。また金の子牛は、主なる神の足台ということでの導入だったようですが、これが偶像礼拝になってしまうのは容易なことでした。我々の場合も「尊敬」「崇敬」だけで礼拝ではありません、と言っても、境界線は微妙であり、文字通りの偶像礼拝になっているかもしれません。特に問題なのは、国家礼拝に繋がりかねない神道における「崇敬」はあぶない気がします。アマテラスオオミノ神や太陽信仰などです。このため、ヤラベアムは反ヤハウェ―信仰の代名詞みたいになり、「ヤラベアムの道」といえば偶像礼拝の代表になって行きます。そして、ヤラベアムは自分を王に指名してくれた預言者アヒアから、「滅びの預言」を受けることになります。そして死に、その子のナダブがあとを継ぎます。おそらくアヒアはエルサレムを都とする統一イスラエルを期待していたのではないか、と想像します。

世襲王制と選任王制の相克のような歴史がイスラエルでは繰り返されます。ヤラベアムの子ナダブの治世は1年強しか続きませんでした。預言者アヒヤ予言したとおり、バシャに暗殺されます。軍のクーデタのようです。そしてバシャはヤラベアムの子孫を根絶やしにします。ここで世襲王朝は途切れます。バシャの治世は23年続きます。その間に起きた大きな出来事は、なんと南王国ユダのアサ王がダマスコのアラム王ベン・ハダテと組んでイスラエルを落としにかかったことです。滅亡はまぬがれますが、散々な被害にあいました。北王国と南王国の対立は頂点に達しました。最悪なのは南王国が外国と手を組んで兄弟国を打つ、ということをしたことです。バシャのあとはその子のエラがあとを継ぎますが、ペリシテ人との戦いの最中、宴会で酒を飲み酔っているときにジムリに殺されてしまいます。暗殺です。エラの在任は1年そこそこです。ジムリは戦車隊の指揮官だったようですが、預言者からの指名があったわけでもなんでもなく、王位を簒奪したにほかなりません。軍はこれではおさまりません。三日天下ではなく七日天下で、軍の多数派は時の指揮官オムリを王に推挙しました。少数派はティブニという者を推しました。ジムリはオムリの軍により包囲され自殺します。そして、第一列王記16:22には「オムリに従った民は、ギナテの子ティブニに従った民より強かったので、ティブニが死ぬとオムリが王となった」と、ありますので、ジブリ自殺のあと、オムリ側がティブニ側を打ち破ったのだと思われます。ここで北王国イスラエルのオムリ王朝が始まります。世襲で四代44年続きます。この時代の大半は南王国では敬虔王とよばれたヨシャパテです。雨降って地、固まるの譬えのように、ジムリ配下のクーデタを機に反対派を滅ぼし、オムリが実権を固めたと言えます。羽柴秀吉と明智光秀のようなものです。オムリの場合はティブニ派を撲滅するのに4年かかっています。オムリはティルツァの首都をサマリヤに移しました。当時サマリヤは何もないところだったようですがそこに首都をつくりました。サマリヤは120mほどの丘の上にありますので、日本で言えば山城のようなものです。最後にアッシリヤに占領された時も、武力占領ではなく水と食料の欠乏による陥落であったと言われています。その都は息子アハブが完成させます。しかし、オムリは列王記の記者からはめちゃくちゃに言われています。第一列王記16:25-26では「オムリは主の目の前に悪を行い、彼以前のだれよりも悪いことをした。/ 彼はネバテの子ヤロブアムのすべての道に歩み、イスラエルに罪を犯させ、彼らのむなしい神々によってイスラエルの神、主の怒りを引き起こした。」とあります。しかし、地上の国王という点から言えば、強力な王でした。この列王記記者のような考え方は申命記史観といいますが、後のユダヤ教の基礎となるものです。旧約聖書にはこのようなユダヤ民族主義とも言うべき流れに抗する流れもあります。これは創世記以降色々な箇所に首をだしてきますが、正統派申命記史観の限界を打ち破るイザヤ、エレミヤの預言者の思想に繋がります。そして「新しい契約」がキリスト教に繋がるのです。ユダヤ教はユダヤ教で生き残り今に至っています。

オムリは経済発展にも力を入れ、特に、北の商業都市国家フェニキアとの交易に力をいれます。この国との連携を強めるため息子のアハブにフェニキアのシドンの王女イゼベルを妻に迎えます。この女性がイスラエルのヤハウェ―信仰を地に貶めます。彼女はかなり気の強い女性だったようで、夫のアハブの言うことに信念がゆらぐような人物ではなかったようです。アハブは少々気の弱いところがあったようです。イゼベルはサマリヤにバアルとアシェラの像をつくり公然と礼拝を行うよう勧めました。アハブの子どもの名前は、アハジヤ、ヨラム、アタリヤであり、ヘブル語名ですので、彼自身はヤハウェ―信仰を維持したいと思っていたのでしょう。しかし、王たる者それではだめです。当時、宗教は、国家存立の基礎ですから、妻や民衆は好きなようにすればよい、と言う訳には参りません。今でも宗教が国家の基盤とされている国は沢山あります。しかし、日本国憲法のように政教分離を厳格に決めている国もあります。これは特に西方キリスト教の血なまぐさい宗教戦争の結果与えられた賜物です。ましてや日本は天皇制国家神道のもとで侵略と戦争を行った経験をもっています。単純に割りきりでこの問題を見てはなりません。神様はその国その国に合った政治と宗教の関係を与えているのではないかと思います。天皇制国家神道の方向性を志向している人もいますが、もってのほか、と思います。

アハブがイゼベルを妻に迎え、オムリの後の王になっていた時、このイゼベルの宗教政策を真っ向から批判し、ヤハウェ―信仰に立ち帰れ、と声をあげたのが予言者エリヤです。たまたまイスラエルの地が干ばつに襲われた時、エリヤは、450人のバアルの予言者と400人のアシェラの予言者と全面対決をし、エリヤの祈りだけが雨を降らせる力があることを実証しました。そしてこれらニセ預言者を殺しました。これを聞いたイゼベルはだまっちゃいません。エリヤを殺すべく追手をおくりました。エリヤは逃げて逃げて、モーセの山ホレブまで逃げました。従って、北王国イスラエルがヤハウェ―信仰の国家になることにはなりませんでした。北王国アハブ、南王国ヨシャパテの時代の顕著な特徴は、南北同盟の時代であった、という点です。王国分裂の後、互いに角を突き合わせてきたのを、この時同盟することに政策転換が行われたのです。主たる理由はシリヤ・ダマスコが強力になりイスラエルへの侵攻を開始しようとしていたからです。二度にわたって、みごと撃退したことが第一列王記20章、22章に記されています。また、その後、アッシリヤが強大化しシャルマナセル王の時シリヤ、カナンの地に侵入しようとしました。この時は、シリヤもイスラエルとの対立などと言っていられません。みんな一丸となりアッシリヤに対抗し、なんとか難を逃れることができました。シャルマナセル側の文書にこのことが載っています。シャルマナセルは大勝利といっていますが、実態はこの連合軍がアッシリヤの侵入をなんとか食い止めた、ということのようです。カルカルの戦闘と言います。その連合軍の中では北王国が供給した部隊が最大だった模様です。北王国はオムリ王朝になってから軍事的、政治的、経済的に力を蓄えていたようです。アッシリヤでは後々になってもカナンの地を「オムリの地」と呼んだようです。しかし、アハブは自分の力を過信し、シリヤを打つべく兵を進めましたが打ち負かされ、戦死してしまいます。このアハブ、ヨシャパテの南北同盟の時代を分裂イスラエル王国の第一次黄金時代という言い方もあります。アハブの後は彼の子のアハジヤが王となりました。王位は2年にすぎません。列王記記者はアハブ同様「ヤラベアムの道」を歩んだと一蹴されています。そのあとはアハジヤに子がおりませんでしたので、弟のヨラムがあとを継ぎます。アハジヤ、ヨラムの時代にはオムリ王朝の力が落ち、衰退期であったと言えます。イスラエル王国は、従来、属国としていたヨルダン川東の各国が離れていきます。アラム、ギレアド、アンモン、モアブ、そしてユダの南のエドムも自立していきます。ヨラムはオムリ王朝最後の王であり、エリアの後継者エリシャが支持したエフーによって王を追われます。ここで世襲王制が一旦とまり、選定王制の伝統が甦っています。エフーは徹底的にオムリ王朝に属する者を殺害し、権力基盤を固めます。なかでも、異教の宗教的習慣を持ち込んだイゼベルは犬に食われると言う残忍な殺され方をします。

では、この時代、南王国はどうだったでしょうか。ユダ王国は北王国に比較し、いかなる意味でも弱小国家でした。しかし、それゆえに、国もまとまりを形成するためにヤハウェ―信仰を重視しました。ソロモンの子レハベアムは8年程度の治世でそのあとはその子のアビヤがあとを継ぎます。しかし、在位はわずか三年でした。アビヤの時代に北王国ヤロベアム王を打ち破った記事が第二歴代誌13章にのっていますが、歴代誌はユダ王国に贔屓目に書かれていますから、文字通りに受け止める訳には行かないでしょう。アビヤのあとはその子アサが王位をつぎます。南王国の場合は王位をめぐるクーデタ、暗殺はほとんどなく、世襲王制が続きます。例外は後ほど触れるアタリヤ女王の時だけです。アサは長期に王位についていました。40年です。彼は宗教改革を行いました。列王記記者から「ダビデのような良き王」と称賛されています。男娼を追放し、偶像礼拝を止めさせ、アシュラ信仰の祖母、母を国政から退けました。彼の後半の治世においてエチオピア人ゼラフの大軍の攻撃をうけますが、辛うじて撃退したようです。歴代誌には、大勝し沢山の分捕りものを得た、と書かれています。何らかの奇跡的出来事があったのかもしれません。また北王国イスラエルの侵入もありました。イスラエルの王はバシャのときです。この時は、シリヤに手を回し、イスラエルを攻めてもらう、という謀略的手段を使っています。アサは宗教改革は行うが彼自身の信仰心は強くないため、予見者ハナニに見透かされ、徹底的な批判にさらされます。北王国と戦うのに、主なる神によりたのむのではなく、シリヤを頼りにしたことが信仰心がない、とされたのです。イスラエルの戦いは主なる神が戦われるのだ、というイスラエルの伝統がこの予見者にはまだ生きていたのです。

アサの子ヨシャパテは父の始めた宗教改革を継続します。レビ人や祭司を地方に派遣して神の律法を教えた、と言われています。民衆の信仰の所にまで入っていった点で注目に値するものだと思います。そして、この時代は南北王国が同盟を組んだ時代であり、分裂イスラエル王国の第一次黄金時代と言われているのは先にもうしあげた通りです。この時代は北王国が厳しい戦争に直面していましたから、その援助を積極的に行っています。ヨシャパテは北王国の王アハズヤとともにタルシシュ、今のスペインと言われる地に貿易船団を派遣しようとしましたが船は難破してしまいます。北王国のアハズヤはアハブの子でオムリ王朝第四代の王です。歴代誌記者はこのアハズヤを「悪事を行った」人物としています。このタルシシュは列王記ではオフィル、となっており、これはどこかを巡って長い論争があります。最近の有力説はインドではないか、という説です。インドとの交流が頻繁にあったとしても全くおかしくはありません。そう言えば、イエス様誕生の時に来た博士というのもインドから来たのではないか、という説もあります。また、ヨシャパテは自分の子ヨラムに、北王国のアハブ王の子アタリヤを妻とします。北と南の親交の証と言うことでしょう。これがユダ王国における宗教に甚大な悪影響を与えます。彼女はアハブの娘ですがその母親は、ツロからきたあの悪名高いイゼベルでした。イゼベルのバアル、アシェラ信仰を受け継いでおり、エルサレムにこれらの神々をまつる宮を建てました。このアタリヤの夫、ヨシャパテの子ヨラムが王となると、アサやヨシャパテの宗教改革は停止され、イゼベル、アタリヤの異教神教が大流行になります。このヨラム王のとき、ユダ王国の南方エドムが離反し、ユダ王国から独立しました。ユダ王国にはこれを黙らせる力はありませんでした。

この後が、本日の聖書箇所です。21:12では「ときに、預言者エリヤのもとから彼のところに書状が届いた」と言われています。この年代にはエリヤはもう火の車で天にあげられていますので、実際はエリヤの弟子エリシャであったと思われます。エリヤが生前にこのヨラムの先を見越してこの手紙をエリシャに託していたのではないか、という説もあります。あり得ることだと思います。内容は、“ヨラムは父ヨシャパテや祖父アサのようにヤハウェ信仰の宗教改革を行う訳でもなく、北王国イスラエルの王のように、なかでも悪名高い不信仰な王アハブのような道を歩んでいる。大きな災害が発生し財産を失い、また内臓が外に出てしまうような病気になり死ぬだろう”という預言でした。この「災害」はペリシテ人とアラブ人が襲ってきたこと、「病気」はおそらくコレラの末期症状ではないかと推測されている病気のことです。そして不幸な死に方をするのは最初にもうしあげた通りです。

ヨラムのあとはその子のアハズヤが王位を継ぎますが、アハズヤは叔父にあたるイスラエルのヨラムを助けるべくイスラエルの陣に居た時、ヤフー革命がおきます。それにまきこまれけがをし、亡くなってしまいます。そのあとが問題です。アハズヤの母、ヨラムの妻のアタルヤが王座を奪ってしまいます。アハズヤの子ヨアシが小さかったこともあるのでしょう。そして王族の全滅を図ります。ヨラム王の娘で祭司エホヤダの妻であるエホシェバはアハズヤの息子ヨアシを隠し、アタリヤの難を逃れました。6年間のアタルヤの治世の間、神の宮に隠れていた、と書かれています。その7年目に祭司エホヤダは一計を案じ、ヨアシを王として認めさせるとともにアタリヤを殺害します。アタリヤは「謀反だ、謀反だ」と叫んだとされています。そしてヨアシの下で新しい宗教改革が始まり、ユダ王国はヤハウェ信仰の国として定着していきます。

以上、分裂イスラエル王国における政治、軍事と宗教の関係をみてきました。この歴史を通して一貫して流れている旧約の心はなんでしょうか。まず、政治は長い時間のなかでは必ず堕落する、ということです。聖書はダビデ、ソロモンの罪の指摘もしていますがそれは単なる個人の罪と言うことではなく、その時代の罪の現実をこのような形で表現している、と捉えるべきです。王国の分裂時のソロモンの子レハベアムの態度、ユダ王国で名君と評されているアサの晩年の堕落、黄金時代と言われ一時的ながら近隣諸国に名をはせた北王国アハブ王、南王国ヨシャパテの反映の裏での宗教的堕落。ヨシャパテも王権を継いだ直後はまだよいのですが後半は軍事力に頼る態度がありありです。またイゼベルとその娘アタリヤの物語りも興味あるものです。日本でも卑弥呼、神功皇后、持統天皇、北条雅子などが居ます。概していえばユダ王国の方がこじんまりとまとまっており、信仰的にもヤハウェ信仰により忠実であったように思われます。どこの国でもそうですが、所謂大国になろうとしたとき倫理的堕落が始まります。日本は経済大国と称せられるだけで十分すぎるくらいです。政治、軍事の上でも大国になろうとすればどこかでしっぺ返しを食らいます。大国争いなどほかの国に任せておけばよい。また王制に関する、世襲王制と選任王制というのもおもしろい。王制というのは世襲に決まっている、ととかく考えがちですがそれはイスラエルの伝統ではなく、「ダビデ契約」以降の話だと言うことです。民主主義と王制の関係を今一度考え直すのも有意味なのでないでしょうか。特に日本のような象徴天皇制という、世界で初めての制度を持った日本は過去の例のない問題に直面しています。そもそも生きた人間は「象徴」に不適なのですから。その他、尽きないくらい話題を引き出せますが、いずれも人類の歴史で回答が見出されていない問題です。主なる神の導きを希うのみです。祈ります。

（ご在天の父なる神様、今日の礼拝の時を感謝します。今日は、南北イスラエルの歴史の中から、イスラエルの思想の一端を学びました。3千年の歴史を隔てていますが、今の世界の有様を移しているようです。大国の間に挟まれたイスラエルがどのような神の導きと裁きにあったか、を知ることによって、今の日本がどうあるべきか、を考えることができますよう、私たち、日本のキリスト者に道をお示し下さい。特に、アジア太平洋戦争の後、主がお与えくださった、平和主義国家日本の道が危うくされています。平和の君、主イエスに従う者として、我々が主の道に忠実でありますよう、知恵と力と、そして証人としての勇気をお与えください。主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）